

神への感謝に生きる

使徒パウロは感謝の人であった。彼のほとんどの手紙は、挨拶の言葉の後に、相手のための神への感謝へと続いている。この手紙もそうである。「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています」(4節)。このパウロの言葉は単なるお決まりの挨拶の言葉ではなく、この手紙が書かれた事情、特にコリントの教会と使徒パウロとの間にあった困難な関係を考慮に入れるとき実に重大な意味と価値のあるものであることが分かる。

コリントの教会は、前回は学んだように、使徒パウロの宣教によって生み出された諸教会の中で最も賜物に恵まれた教会であったが、教会内に道徳的な問題や教理的な問題が次々に起こり、その解決と指導のためにパウロを最も悩ませた教会でもあった。そしてそれらに加えて彼を悩ましたものがもう一つあった。

当時の初代教会の中には、使徒パウロの使徒職(使徒としての権威)を否定し、彼の異邦人宣教に執拗に反対する「ユダヤ主義者」と呼ばれるグループがあった。パウロという人は、十二使徒のようなエルサレム直系の正当な使徒ではなく二流三流の伝道者にすぎず、しかもあちらこちらの教会を回っては献金を集めて私腹をこやしている、と個人攻撃をもってパウロの伝道を妨害した。コリントの信徒たちの中には、教会に入り込んだこのグループのパウロに対する悪質な非難中傷に同調する者も出てきてパウロを悩ましたのである。使徒パウロにとってそれはどんなに辛かったことだろうかと思う。

人からいわれのない中傷を受け、非難攻撃され、或いは裏切られるようなとき、私たちはただちにそれに反発し、反論し、自分を弁護し、相手に仕返しをしようとする思いにかられる。これが私たちの偽らざる姿である。しかしパウロは、コリント人の彼に対する非難中傷に対する反動から、怒りの思いをもって彼等を攻撃しなばくということを決してしなかった。彼は、彼等に与えられている「神の救いの恵み」の素晴らしさのゆえに、むしろ神に感謝をささげているのである。

たとえ自分を非難攻撃し自分を悩ますものであるとしても、コリントという道徳的、宗教的に全く退廃した大都会の中で、彼らが忌まわしい過去の生き方から神に立ち帰り、今や救いの恵みに与っているということ、そして荒削りでありながらも、未来の救いの完成の日をめざして信仰と希望をもってキリスト者として生きているというこの事実、パウロは神の驚くべき恵みの御業を見て、むしろそのことの故に神に感謝するのである。

どのような時にも、このように常に「神の恵みの視点」から人を見、物事を見ることの大切さをパウロは私たちに教える。人々の誤解や無理解、非難や反対、その他どんな辛い目にあっても、私たちがなお耐え忍んで相手のために祈っていけるのは、確かに私たちがそのように「神の恵み」の視点から物事を見ることを学んだ時である。

人生の歩みの中で様々な体験、ときには辛く苦しい体験を通して、私たちは神の御前にキリスト者として訓練され、その品性が練られ、奥行きのある霊の人・愛の人として変えられていくのである。キリスト者の人生はそのような神の恵みのお取り扱いのプロセスなのである。